

先人の知恵から

14

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

今回は、次の8つを挙げてみた。

- 親の心子知らず
- 親はなくとも子は育つ
- 終わり良ければすべて良し
- 凱風南よりして彼の棘心を吹く
- 蛙の子は蛙
- 顔で笑って心で泣く
- 垣壁くして犬入らず
- 学問に王道なし

<親の心子知らず>

子を思う親の気持ちがわからず、子は勝手なことをするものだということ。また、親になってみなければ、親の気持ちは推し量れるものではないということ。

子どもが思春期に入ってくると、親は今までの素直な子どもではなく、何かにつけ

て反発したり不遜な態度を取ったりする様子に腹を立てることがある。成長の過程と頭では分かっている、「こんなに苦労して育てて来たのに・・・」などと思ってしまう。そんな親に出会うとこの諺を伝える。親の心がわかるのは、自分が親になってからだ。また同様に、「子の心親知らず」ということもできる。この二つは対で使う事が出来る。親が嘆くと同様に子も嘆いているとわかれば、親も少し気持ちが落ち着くし、子どもへの思いも変わるだろう。親は子どものためと思って、生まれてからずっと一所懸命子育てをしている。

何があってもこの子は守らなくちゃという思いで頑張っている。しかし思春期の子どもにはそれこそが迷惑。何とも切ない話だが、「上手に子育てをされたから、今のこの状況があるのですよ。」と伝えると何とか納得してくれる。

英語では・・・

When the rain rains and the goose winks little wots the gosling what the goose thinks. (雨が降って親ガチョウが目を閉じるとき、その子には親の考えていることが殆どわからない)

<親はなくとも子は育つ>

親が居なくても、子どもは自分の力や他人の善意などで、何とか成長して行くものである。世の中はそれ程心配したものではないということ。「渡る世間に鬼は無い」も類語。

心配性で過干渉な親が多い中で、いきなりこのような諺は使い辛いが、思春期が進み、自立の時期を迎えた若者の親に対しては、この言葉と「可愛い子には旅をさせ」を度々使う。大学を選ぶときに、自宅から通えるところを第一条件にする親も多い。子どもの方も自宅から通える大学を選ぶ。

就職しても自宅から通う子も多い。親が「初任給は安いから自宅から通いなさい」と引き留めることもある。しかし、むしろ若いうちは苦勞をさせた方が良い。お金が余りなくても、無いなりに生活をして行く事で学べることも多いだろう。

以前田舎から都会の大学に進学した子から聞いた話だが、ある時アパートの洗濯機が壊れた。困って電気屋さんを探して電話し、来てもらった。冬の事である。彼女は、暖房をあまり使わないようにと部屋でちゃんちゃんこを着ていた。田舎の母親が送ってくれたものだ。電気屋のおじさんは、東北から来ていたそうで、「田舎からでてきた

の？」と修理代を只にしてくれたそうだ。

怖い話ばかり聞いているので、「人を簡単に信じてはいけない」と教える昨今だが、こんな話を聞くと、世の中捨てたもんじゃないと思う。

人の親切に触れて、人は優しく育つのではないだろうか？そのためにも、親元から離れて暮らす経験は大事だと思う。

<終わり良ければすべて良し>

物事は最終の結果が全てだということ。「終わりが大事」とも言う。

この諺はよく使う。親に対してだけではなく、自分自身や周りの同業者、先生方など様々な場面で使う。カウンセリングをしていても、〇〇療法が効くとか効かないとかではなく、クライアントの状態が良くなれば終了となる。クライアント自身の努力で改善される場合もある。もちろんカウンセラーとしては、クライアントが良くなるように最善を尽くす。結果が良ければ、それで良い。不登校の子が学校に行けるようになったとか、辛い症状に苦しんでいた人が、症状から解放されたとか、今抱えている問題が解決したとか、今の状況より少しでも良くなるとすれば、それで良いではないか。過去を穿り返して、ああでもないこうでもないと言っている、何も変わらない。起きてしまったことは変えようがない。でも今からはいくらでも変えられる。良い結果を得られた所からスタートをすればよいのだ。

英語では・・・

All is well that ends well. (終わりが良いのは良い事だ)

The end crowns all. (終わりが全ての物事の冠となる)

＜凱風南よりして彼の棘心を吹く＞

母親が愛情を持って子どもを暖かく見守り育てることの例え。暖かい南風が優しく吹いて、いばらの若い目を育てる意から。棘心は棘のあるいばらの木の芽生えで手のかかる子を表す。出典ではこの後に『棘心きょくしん 天天てんてんたり、母氏ぼし劬くろ勞うす』(元気な子はまだ幼く、その養育のために母は苦勞する)と続く。出典は「詩経」

子どもを育てることは、親が十分に大人であり、優しく見守れる度量があることが求められる。そうして大切に育んだ子が大きくなってきてイヤイヤ期や、反抗期になると、子どもたちは常に親に手を掛けさせ、心も折れそうになって苦勞が耐えない。そんな子育ての覚悟を伝えるようなこの諺を、今の親たちに伝えたい。親たちは、自分の時間を持ちたいというが、子育ての間、特に子どもが小さい間の数年間は自分の時間を持つのを諦めると言う事はできないのだろうか。自分の時間を持つためにスマホに没頭すると言う事も聞く昨今、小さい子どもと向き合う事に不満を感じるのであれば、子どもを持つのが早いのではと言わざるを得ない。

＜蛙の子は蛙＞

子どもの才能や性質は親に似るものだということの例え。蛙は子どもの頃は親と形の違うオタマジャクシだが、成長すれば親と同じ蛙になる事から。『瓜の蔓に茄子はならぬ』も同義。

子どもが生まれるまでは、五体満足に生まれて欲しいと思い、それ以上のことは望まない。しかし、大きくなってくると、我が子に「才能」の片鱗を探し、「きっとこの子は天才だ」と思いたくなる。それが親と言うものだろう。しかし、そうそう天才は生まれては来ないし、下手に英才教育でもしようものなら、かえって才能を潰す事にもなりかねない。

基本的には、子どもは両親の遺伝子を貰っている。両親が優秀であれば、それなりに子どもも優秀である可能性は高い。勿論例外はあるが。父親も母親も、子どもは自分くらいにはなると考えるのならともかく、未だ三歳の段階で「東大に入れる」とか「将来は医者にしたい」などというのを聞くと、この諺を使い、高望みしないように育てていけば、もしかしたらそういうこともあるかもと伝えている。

ノーベル賞を貰った人たちのこども時代をみると、親が特に大きな期待を持っていたとか、英才教育をしたという話は聞かない。余りのプレッシャーに潰される高校生も沢山見てきたが、親の期待が大きすぎると子どもはその期待に押しつぶされる事が多い。程ほどに期待していくのが大事だが、この「ほどほど」が難しい。

<顔で笑って心で泣く>

悲しみを顔に出さず、笑顔で人に接すること。また、笑顔ではいるが、内心は悲しさに耐えられず、密かに涙を流す事。

最近では自分の感情を出すことが良しとされており、悲しいときは子どもよりもその感情を出している大人を見かけるようになった。

ある方が病死され、そのお葬式で、自分の母親の棺にすすみ最後のお別れをする時、10代半ばの子どもがいる娘が、酷く取り乱し、泣きわめくということがあった。悲しみの表現は人それぞれではあるし、その故人との結びつきの強さによっても異なるだろうが、突然の死でもないのに別れの覚悟ができていなかったのだろうかと思いに思ったことがある。

一方で、すごく悲しく、気落ちしているだろうと思う人が、とても気丈に振舞っていると、余計に涙を誘う。

日本では、悲しみや自分の感情をあまり顔に出さずに、心にとどめ、人目のないときに一人で泣くことが美德とされてきた。

大人の振る舞いとして、子どもたちに見本を示していく事はどのような場合も大切である。親を見て子はその振る舞いを自然に学んでいく。顔で笑って心で泣くことは、生きていくと度々経験することであろう。感情をそのまま表すことも必要な時はあるが、自分の気持ちを押し殺して笑顔でいられるということは自分の感情のコントロール力が強いということになる。自らの感情をコントロールできるという意味合いで、

親や子どもにこの言葉を伝えることが度々あるのでここに入れた。

<垣堅くして犬入らず>

家庭がしっかりしていれば、それを乱すようなものが外部から入ってくる事は無いということ。

家族について学んでいると「境界」の問題が家族の問題において、重要であることを知るだろう。このことわざは、正に「境界」の話である。

家庭がしっかりしているとはどういうことか？それは、家族が誰か（父親や母親など）を中心に、しっかりと纏まっていることであろう。家族が問題を抱えたときに、解決に向けて家族のみで考え、決定していくことができる力を持っているということではないだろうか。そうであれば、他の何かがそこに影響を与えることはない。

「困ったときの神頼み」という言葉もあるが、占いや他人の力を借りるのは、解決努力をしても解決できなかった場合か、解決努力そのものを他に頼る場合であろう。筆者のようなカウンセラーのところに相談に来ることが最近では多くなってきているが、昔から長老に相談するなどということはあった。それが悪いということではない。

この諺で言う「犬」は混乱や災いのもとになるような、悪い意味での外部の「影響力」を指している。家族を守るためには、適度に堅い垣根が必要である。かといって堅すぎる垣根は、何物をも拒み、必要な支

援を受けることさえできなくなる。程々と付け加えたいところであるが、高価な壺を買わされたり、貢物を要求されたりというような、とんでもない事態に遭わないための戒めとして使われてきた。古くから言われてきた言葉は今も「境界」という言葉で家族の問題に生かされている。

<学問に王道なし>

学問を修めるのに、手軽に身に付ける事が出来るような特別な方法はないということ。ギリシャの数学者ユークリッドが、幾何学を学んでいたエジプト王トレミーの「もっと手軽に学ぶ方法はないのか」という問いに対し「幾何学に王道なし」と答えたとという故事に基づく。

最近の学校の子どもたちの様子で気になることに、大人にとって便利なツールを子ども達が使うことで、面倒なことをさらに面倒くさがってやらなくなってきたことがある。

調べ物はググってプリントアウトして持ってくる。重たい辞書を引くことはせず、電子辞書を使う。

パソコンや電子辞書がなかった時代には、調べ物は図書館に行き、どの本棚のどの本を選べばよいかを司書に聞いたり、自分で探して、本を選び間違えたり、棚を間違えたりという時間がたくさんあった。棚を見ながら、「こんな分類のものもあるのだ」と違うものを発見したり、或いは選んだ本が目指したものとは違っても、その本の内容に触れることで、余計な学びもあった。

辞書で何かを引くときも一緒である。国語辞典や大辞林などを引いて、目的の言葉を探す間に、余計な言葉を発見して「へえ〜」と余分な知識を得たこともあった。目的の言葉についても、電子辞書よりずっと詳しく書かれていたり、例文も一杯あったりする。また、その言葉の前後の言葉にも、つい目が言って読んでみたりしたものである。

こうしたことは「無駄」であろうか？ものを学ぶときに、簡便さばかりを追求すると、より深く学べる機会を失うのではと危惧してる。

二言目には「めんどい」と言う子どもたちに、この言葉を送りたいと思う。子どものうちは、面倒くさがらず、もっとじっくり一つ一つの学びを進めて行ってほしいと思うから。

英語では・・

There is no royal road to leaning.

今回はここまで。

出典紹介

詩経

中国最古の詩集。五経の一つ。講師が約三千の古詩の中から選んで成立したと言われるが未詳。紀元前十世紀から、前六世紀ごろまでの詩三百十一編を収録。風（国風ともいう。民謡）・雅（宮廷の祝宴歌）・頌（祖先を祭る歌）の三部構成。